
スマブラ小説 星炎の魂 ~ The Battle royal ~

ムニン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スマブラ小説 星炎の魂 ｝ The Battle royal
｝

【Nコード】

N1408BA

【作者名】

ムニン

【あらすじ】

スマブラメンバー全員が巻き込まれた死のバトルゲーム【バトルロワイアル】。それはメンバー全員に呪いのようにつけられた？魂の宝珠？が壊れると、絶対に死んでしまうという呪いのような悪夢のゲームの始まりだった。

オールスター他さまざまなゲームキャラクターが登場！

一同に襲いくるのは希望か！？それとも絶望か！？

無事全員脱出できるのか！

脱出方法にはどうやら伝説の秘宝が手掛かりで・・・!?

OP 終わりの始まり

プログラムインストール

完了まで残り・・・12%

ゲーム参加者 情報更新中

完了まで残り・・・30%

オペレーションシステム・・・アプリケーションソフトウェア
ア・・・

ゲーム準備中・・・

わずかにともる緑色の光が、うつすらと広いドーム状の建物を照らしていた。

全方向の壁や床には常人では理解できないような数式や言葉でびっしりと埋め尽くされており、しきりに現れては消えていく数字、激しく動いているグラフなど、モニターのように映し出

されていた。

否、この建物がもう、一つの大きな機械なのだろう。

「どづいっことだこれは！」

「ここはどこだ!？」

「俺達を開放しろ！」

「何よこの箱！開けなさい！」

激しい剣幕の音が、ドームの中央に置いてある巨大な正四角形の箱の中から多数聴こえる。

増強を全く把握していないのか、パニック状態に陥っているようにも感じ取れる。

箱をしきりに叩くが、箱には傷一つつけられない。そもそも叩く振動で、震えさえもしない。

「ねえ！どうなってんの!？」

「暗くて何も見えない！怖い！怖い！早く出してええええ！」

「僕たちさっきまでピーチ城にいたよね!？」

「何か機械音が聞こえる！やだっ何!？」

「暗くて何も見えねえ！くそっ！どこのどいつだ!？」

「嫌な予感がする……！皆ひとまず落ち着いて！」

「この状況で落ち着いてなんかいられないiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！」

箱の中で叫ぶ彼らの声に同調するように、ドーム中の数式たちが一層早く、目にとらえられないほどの速さでプログラムを組んでいく。

「……くっくっく……スマッシュブラザーズの諸君！ごきげんよう」

突如、機械で加工された声が響き渡る。

「誰！？」

「ここから出して……」

「どちら様？」

「こんなことしたのはお前か！？」

「早く出せこの野郎！」

「誰？誰なの・・・？」

「・・・君たちにはこれからゲームをしてもらおう。・・・テレビゲームのように画面でピコピコするようなやつではなくて、バーチャルリアリティ・・・いわゆる仮想現実の世界に行ってもらおう」

「バーチャンガリアリイ？って何？」

「馬鹿！バーチャルリアリティだ！」

「仮想現実・・・？意味がよく・・・全然わからない」

「なんでゲーム世界に！？」

「俺達を捕まえた理由を応えろ！そもそもお前は誰だ！」

くつくつく・・・と謎の人物は再び笑った。

「・・・？」「私の正体は答えられません。でも、理由は答えてあげましょう。スマッシュブラザーズ全員を抹殺するためです」

「!？」

「抹殺!？」

「私たち殺されちゃうの!？」

「ふざけるな!誰が貴様などに・・・!」

「なぜだ!!!」

「????」
この世界はひどくもろい。我々(・・・)が手を
合わせて戦えば、この世界などすぐに制圧できよう。しかし、それ
ができぬのは、お前たちという存在があるからだ。今まで数多くの
ものがお前たちと戦い、敗れた・・・だから我々は考えた、戦いの
舞台が現実でなければ、確実にお前たちを死に追いやれると」

「まさか僕たちを殺して世界を征服するつもり!？」

「ふざけんじゃねえ!」

「こんな場所!私たちが力を合わせれば・・・!」

「世界を征服なんか絶対にさせねえ!!」

「????」そしてお前たちは、作り物の世界で息絶え、惨めに死ぬのだ!」

ピーと

機械の羅列から、音が鳴った

それは、始まりの合図であり

終わりの合図だったのだ。

「なんだ……?」

「体が重い……」

「眠たい……」

「くっ……！」

「くそオっ……！お前ら……死ぬじゃねえぞ……！」

「……」では諸君。楽しんで……逝ってくるがいい

【GAMESTART】

STAGE 1

開始

ゲーム参加者

マリオ

ルイージ

ドンキーコング

ディディーコング

リンク

ゼルダ

ヨッシー

サムス

ワリオ

カービィ

デデデ

メタナイト

フォックス

ファルコ

ピカチュウ

ピチユウ

プリン

ルカリオ

ピット

マルス

アイク

アイスクライマー

ネス

リユカ

Mr.ゲーム&ウォッチ

ピクミン&オリマー

キャプテンファルコン

以下二十九名…

OP 終わりの始まり（後書き）

全員参加と言っても一部出ていません（汗）

名前だけだと二十八名ですけどアイスクライマーは二人だから一人足しています。

第一話 終わりの始まり

生じるのは視界のブレと、歪んだ浮遊感。

見えるのは無数の数式の羅列のアーチと、白い光。

聴こえるものは機械の鳴き声。

感じるものはない、ひたすら無。

吸い込まれるように落ちていく。

体が浮いている。

意識が浮いている。

流されていく。

アーチを潜ってやがて見えてくる、光。

その光の中に入っていくと

視界も意識もすべてが光で真っ白になる。

マリオ「……………」

マリオは涼しげな風を感じて、うつすらと目を開けた。

マリオ「……………あれ……………」

まずマリオの視界に映ったのは、青い空だった。

白色の雲が優しい風に流されて、空を移動している。

マリオ「……………」

状況が把握できないのか、マリオは起き上がってキョロキョロあたりを見回す。

マリオ「ここは、森・・・？」

ぐるりと自分の周辺360度を見ても、木が生い茂る森の中だった。

どうやら自分はこの森の真ん中で倒れていたらしいと、マリオは理解した。

マリオ「それにしてもなんでだ？というか俺はさっきまで・・・っ！」

マリオはさっき起きたことを思い出した。

謎のドームに連れ込まれ、さらに謎の箱に閉じ込められて・・・

マリオ「一体どうなっているんだ！？皆は！？」

マリオは立ち上がって、皆を探した。

しかし、あたりには誰もいない。

マリオ「おーいっ！ルイーゼー！ピーチ！誰でもいい！返事をしてく

れ！」

マリオは声をあげて皆を呼ぶが、返事は一向に返ってこない。

マリオ「まいったな……皆どこにいるんだ……？あっちのほうか？」

困り果てながらもマリオは森の中を歩く。

すると、木の枝に何かピンク色のものが引っ掛かっていることに気が付いた。

マリオ「ただの布……じゃないよな！」

マリオはその木にするすると登り、ピンク色の物に近づくと、近づくにつれて、それがいったいなんなのかわかっている

マリオ「カービィ！？カービィだよな！」

どうやらピンク色の正体はカービィで、意識を失って枝に引っかかっていた。

マリオ「今助けるぞ！」

マリオはカービィを傷つけないように枝から外^{はず}す。

マリオ「よかった、怪我はないな！しっかりしてくれ！カービィ！」

マリオが軽くペチペチとカービィの頬を叩くと、カービィは声をもらしてゆっくりと目を開けた。

カービィ「……あれえ？まリオ……？」

マリオ「よかったあ……」

マリオはカービィが無事だったことに安堵する。

カービィ「ボク……寝てたの？」

マリオ「俺もそうだった」

カービィ「俺も？……あれ？ここは森の中？」

マリオ「どうやらそうみたいだな。カービィ、さっき会ったことを覚えてるか？」

カービィ「さっきさっきって……ピーチ城でみんなでパーティーしてたじゃん」

マリオ「違う！その一つ後だ！」

カービィ「えっと……あつー！」

マリオ「思い出したか!？」

カービィ「うん！ボク達気が付いたら変な箱の中にいて……それで誰かになんか言われて……！」

マリオ「そうだ……あの後いつたい何が起きたんだ？」

カービィ「わかんない……気が付いたらボクはマリオに起こされてここにいます」

マリオ「だよなあ……訳が分からないな」

カービィ「マリオもボクみたいに誰かに起こされたの？」

マリオ「いや、俺は一人だ」

カービィ「皆は？」

マリオ「わからない……俺が起きて最初に見つけたのがお前だ」

カービィ「よかった……木にただ引つかかっている布だと勘違いされて置いて行かれなくて」

マリオ（一瞬そう間違えたなんて言えない）（汗）

カービィ「じゃあ早くみんなを探さなくちゃね！」

マリオ「そうだな・・・急ごう！」

第一話 終わりの始まり (後書き)

謎の森で合流したマリオとカービィ・・・
他のメンバーの行方はいかに？

第二話 搜索開始（前書き）

ゲーム&ウォッチはウォッチに略されています。

第二話 搜索開始

リンク「ワリオ、ワリオ！起きてくれ！」

ワリオ「んゝ・・・？」

リンクのゆさぶりによって、ワリオは眠りから目覚めた。

リンク「無事でよかった。ただ気を失っていたみたいだな」

ネス「この分で行くと、きっと皆眠っているだけだね。探さなくちや」

ワリオ「なんだあゝ？ゴチャゴチャうるせえなあ・・・人の頭の上をピーチクパーチク・・・」

ワリオはうつとうしそくに眼をこすって、起き上がった。

ワリオ「？リンクじゃねえか。それにネスも。なんだあ？そんなに飲んだつもりじゃなかったのに、オレとしたことが酔って寝ちまったのか？」

リンク「そうじゃない！そもそもここはピーチ城ではないんだ！」

ワリオ「ピーチ城じゃないいいいいいい？」

ネス「さつき起きたこと覚えてる？」

ワリオ「さつき起きたことだああああ？知らねえよ一体何を言っているんだか・・・ピーチ城じゃねえってオレ達さつきからずっとい
るじゃねえかよ。お前らまで酒にでも酔ったのかあ？」

ネス「あちゃ〜・・・やっぱり記憶が混同しちゃってるね」

リンク「・・・残念だが、ここはピーチ城では全然ない」

ワリオ「はあ？」

どういうことだ、と言いかけてワリオははっとした。

周りの風景がピーチ城の美しく細工された白壁ではなく、背の高い木々ばかりの、湿気の多い森だった。

混乱したワリオは、頭を振ってもう一度周りを確認する。

ワリオ「なんだここは？誰かバーチャルスペースイクイフメント仮想空間装置でも持ってきたのか？それともオレは夢でも見てんのか？それともオレは

メタナイト「酒には酔っていないように見えますよ。ワリオ殿」

ワリオ「うおおっ!？」

リンク「誰だ!？・・・ってメタナイトじゃないか！」

ネス「誰かと思ったらびっくりしたくメタナイトか。でもよかった無事だったんだね」

メタナイト「十分ほど前に意識を取り戻して、メンバーを捜索していたんだ」

リンク「今のところ誰かに会った？」

メタナイト「いや、お前たちが最初だ」

ネス「この森相当広いね……ぼく達みたいはどこかで誰かと合流できているといいんだけど……」

ワリオ「おい今どういう状況なんだよ。お前たちの話が全然通じてこねえぞ？オレにもわかるように説明してくれ！一体ここはどこなんだ!？」

リンク「ワリオは覚えていないのかい？」

ワリオ「何のことだ!？」

リンク「謎の箱の中に閉じ込められたことを」

ワリオ「謎の箱…… あ!」

ネス「ぼく達も記憶は曖昧なんだけど、誰かに『ゲームの世界に行ってもらう』みたいなこと言われて、気が付いたらここにいて

本当に少ししか思い出せないけど、ここがああ箱から転送された場所っていうことだけは確かなんだ」

ワリオ「……んで、この森に散らばったメンバーたちを、お前たちは探っていて俺を見つけた、と」

リンク「そういうことだ」

ワリオ「なるほど大体分かった。……しかし、あの時の記憶が霧がかかったようであるで思い出せねえ」

メタナイト「我々が何故の目的でここに転送されたことも、覚えていない……」

ネス「それで『ゲームの世界に行ってもらおう』だよ？なんていうかその……ほのぼのしているというか……」

ワリオ「ゲームの種類ジャンルや内容にもよるぞ。むむむ……」

ネス「そういえばワリオはゲームを開発してるんだよね。この手のことには詳しくそう」

ワリオ「あつたりめえだ！ゲームのプロだオレ様は！するのもやるのも作るのもな！」

リンク「僕はそういうのにはあんまり詳しくないな……」（汗）

メタナイト「私もだ」

ネス「何か今の状況でわかることある？」

ワリオ「むむむ……そうだな。とりあえずはメンバー全員の安否

を確認して集めないとだめそうだな」

ネス「やっぱり？」

ワリオ「ゲームつつうのはメンバーを集めねえと始まらねえ。だからオレたちでまず一群パーティを組むんだ」

メタナイト「では他のメンバーの搜索をしに行こう」

ネス「やっぱりそれが一番最善だよな」

リンク「迷わないように気を付けて行こう！」

ワリオ「くそつ！オレは一群パーティをくんで仲間を探すんじゃなくて、宴パーティの続きをやりたかったぜ！」

ネス「まあまあ落ち着いて・・・」(汗)

ワリオ「うまい酒や飯！ふかふかのベッドで眠れると思っていたのに！！くそつたれ！！」(怒)

リンク「そんなこんなで君は結構食べていたじゃないか」(汗)

ワリオ「食いたらなかったし飲みたりねえ！！しかも眠ったのは小汚ねえ草むらかチクショーッ！！」(怒)

メタナイト(しかし・・・我々はあの時、間違いなくピーチ城にいた。では何故突然あの箱の中にいたのだろうか？　まるで意

図的に誰かに記憶をこっそりと抜かれてしまったかのような気さえする)

リンク・ネス・メタナイト・ワリオの一群、^{パーティ}森で仲間を探しに進む

サマス「プリン！プリン！生きてるわよね！？死んでないわよね！
しっかりして！」

プリン「プリユ……？なに……誰？」

サマス「プリン？よかった！気が付いたのね！」

プリン「？その声は……サマス？」

ファルコン「俺もいるぞ！」

ゼルダ「私もいるわ」

ナナ「私もだよ！聞こえるよね私たちの声！」

プリン「……なあに？この状況……プリ寝てたプリか？」

ファルコン「どっか体でおかしいところはないか？どこも平気か？」

プリン「別に・・・大丈夫プリけど。ここはピーチ城？ピーチ城の中にこんなに大きな森あったプリか？」

サムス「いや、城の屋内に森はないわよ、普通」(汗)

プリン「じゃあピーチ城は普通じゃなかったってことプリ？」

サムス「だからそういう意味じゃなくて・・・！」(汗)

ファルコン「屋内に森がある城なんて、プールの中が水族館と同じくらいありえないことだぞ！」

ナナ「えっと・・・そのたとえよくわかりませんファルコンさん」
(汗)

ゼルダ「何がともあれ無事でよかったわ」

プリン「ここが城じゃないならどこなの？」

ファルコン「お前覚えていないのか？」

プリン「覚えて・・・？」

ナナ「ほら！私たち大きな箱の中に閉じ込められちゃったじゃない！」

プリン「・・・なにそれ？覚えてないプリよ。知らないプリ。身に覚えもないプリ」

ナナ「え？」

ファルコン「もう一度よく思い出してみよ。俺たち確かに・・・」

プリン「・・・？」

プリンは困った表情をして、必死に思い出そうとしているが、一向に思い出した傾向はない。

サムス「ゼルダ、もしかして」

ゼルダ「ええ、・・・おそらくプリンは私たちがおぼえているはずの記憶を丸ごと忘れてしまっているんだわ。私たちがところどころしかこのことを覚えていないのと同じで」

ナナ「そっか・・・」

プリン「どういうことなの？説明してほしいプリ。頭がこんがらがっちゃいそうプリ・・・」

ファルコン「それは歩きながら説明するさ。とりあえずはほかの皆を探しに行かないとな」

サムス「そうね」

ナナ「ポポ・・・無事かなあ？」

ゼルダ「きつと大丈夫よ」

プリン「・・・良くわからないけどわかったことが一つだけあるプリン」

ファルコン「何だ！？思い出したのか！？」

プリン「ファルコンがハーレムの花畑にいるってことだけプリン」

ファルコン「はああっ！！！？」

サルス・ゼルダ・ファルコン・ナナ・プリンパーティの一群、困惑しながらも搜索を始める

デデデ「つまりわたしたちは強制的にここに送り込まれたってことかぞい？」

ルイーダ「そういうことになるね・・・」

ピカチュウ「うーん・・・そうだったような気もするしそうじゃない

かったような気もするピカ」

ヨッシー「わたしははっきりと覚えていますよ！『ゲームの世界に行ってもらおう』みたいなこと言っていましたよ！」

ドンキー「すげえなヨッシーよく覚えてるなあ。おれなんかただ箱に閉じ込められたことしか覚えていないぞ？」

ウォッチ「ソレサエ覚エテイナイ私ハドウシタライインデシヨウ・
」

ルイージ「たぶんきつと個人差があるんだよ」

デデデ「じゃあ一番覚えてる奴が優勝かぞい！？」

ピカチュウ「いや、たぶんそういうことじゃないと思うピカ……」

(汗)

ドンキー「で？ヨッシーはどのくらい覚えているんだ？」

ヨッシー「えっとですね……『スマッシュブラザーズをま……』

……する『？』

ドンキー「ま……するってなんなんだよ」

ルイージ「スマッシュブラザーズまではわかるね」

ヨッシー「スマッシュブラザーズ後の言葉が難しく覚えていないんです」

ドンキー「はつきりじゃねえじゃんかよおい」

ウォッチ「私ミタイニ何モ覚エテイナイ人モイレバ、ヨッシーサン
ミタイニ覚エテイル人モイルミタイデスネ」

ルイージ「それをつなげていけば真相にたどり着けるかな」

デデデ「なんだかパズルみたいだぞい」

ピカチュウ「みんな無事かな？無事でありますよおおおにいい！
！！」

ルイージ・デデデ・ピカチュウ・ヨッシー・ドンキー・ウォッチ・
ヨッシーの一群、^{パーティ}解決策を考えながら進む

第二話 搜索開始（後書き）

きつとワリオはゲームの攻略本を買うのではなく自作で書いてしま
いそうな気がします（笑）

第三話 問題開始

あれから数十分が立ち、マリオとカービィは、ポポ・ピチュー・リュカ・まるすと合流することができた。

この一群はほかの仲間を探して、ひたすら森の中を歩いていた。

ポポ「あの・・・マリオさん」

マリオ「？」

ポポ「ぼく達・・・いったいどうなっちゃったんでしょうか・・・」

マリオ「俺にもよくわからない。とりあえずは皆を探さなくちゃな」

ポポ「ですよね・・・はあ・・・ナナ、無事かなあ？」

カービィ「ナナなら大丈夫だよ！みんなみんな絶対大丈夫だよ！」

ポポ「そうだといいんだけどね・・・」

リュカ「そう思わないと今はやっていけないよ。これでさっきの記憶が思い出せればなあ・・・記憶が曖昧で何があったのかも全部ゴチャゴチャだよ・・・」

マリオ「ややこしい話はみんな集まってからにしよう」

ピチュー「今何時で何日なんだろう・・・空が青いからまだ夜ではないってことしかわからないピチュー・・・」

マルス「焦らず落ち着いていこう。こういう時は冷静を保つことが一番大切だよ」

カービィ「そうお？」

ポポ「マルスさんはいつも落ち着いてますよね」

マルス「剣士たる者こうでなくちゃね」

マリオ「ほお、参考にさせてもらっぜ」

ピチュー「こんな状況で落ち着きたくても落ち着けないピチューよ！」

リュカ「ぼ、僕も・・・」

マルス「そういう時はね、手のひらを出して」

ピチュー「こっぴちゅか？」

マルス「それでね、もう片方の指で手のひらに『人』って字を書いて」

ピチュー「指からはインクでないピチューよ」

マルス「そ・・・それはそうだよ。形だけね、形だけ」（汗）

マルス「指からインクなんざでたら恐ろしいだろ」（汗）

カービィ「なんだかおもしろそうだからボクもやるっ」と

ポポ「ぼくも」

マリオ「あー聞いてたら思い出してきた。このおまじないの内容」

リュカ「え！？これおまじないだったんですか！？」

マリオ「おまじないじゃなかったらなんなんだよ！！」

リュカ「いや、マルスさんが魔法を教えてくれているのかと」

マリオ「いくらマルスでも魔法は使えないだろ」（汗）

マルス「ふふっ本当にそうだと思うの？マリオ？」

マリオ「なっ・・・なんだその達観したような笑みは・・・！まさかお前っ」

ポポ「マルスさん魔法が使えるんですか！？」

マルス「じゃあクイズ形式でいこうか 問題『僕は魔法が使えるでしょうか』。選択肢？実は使える。？真っ赤な嘘で使えない。？その他 さあどれだっ」

マリオ「なんだよその他って・・・」

ポポ「?! 実は使えるにします! だってマルスさん前から魔法使
っぱかった!」

マリオ「魔法使いっぱいイ〜?」

カービィ「ボクも?! そうだったらおもしろそう!」

リュカ「なんだかさつきからカービィは面白そうなこと探してるね
・」 (汗)

カービィ「わけのわからない場所に来ちゃったんなら面白いことを
探そうよ! そういうリュカは?」

リュカ「僕は・・・?」

マリオ「お」

ピチュー「え!」

マルス「どうしてかな?」

リュカ「なんていうかその・・・? 夜は魔法が使えなくても昼は使
える? みたいな感じで、時間や日にちとかによって違うんじゃない
かなあって」

マルス「なかなか考えたね」

ピチュー「じゃ! じゃあピチュは? の使えないにする!」

マリオ「俺もピチューと同じで」

マルス「夢がないじゃないか」

マリオ「お前が魔法を使えるわけがない」

マルス「なんで？」

マリオ「なぜなら胡散臭いからだっ！」

マリオの言葉に、マルスを除いた全員が吹き出して笑い始めた。

マルス「うっ 胡散臭いだなんてひどいなあ・・・」

ポポ「それで答えはなんなんですか？」

マルス「答えはね・・・」

アイク「答えは？真っ赤な嘘で使えない、だ。詳しく言えば？そもそもそんなことを話す必要がない、だ」

マルスが言葉を発しようとしたと同時に、木の陰からアイクが現れた。

ポポ「アイクさん！」

ピチュー「無事でよかったピチュー！」

マルス「なっ・・・アイク！いきなり出てこないでほしいな！驚いたじゃないか！」

アイク「お前がおもしろそーなホラ吹きクイズしていたから、ここで待っていてあげたんだよ」

マルス「その？おもしろそー？な部分がわざとらしい棒読みで気に入らないな」（小怒）

アイク「はっはっはっ」（もちろんここも棒読み）

マリオ「なんだ！やっぱり嘘か！」

カービィ「なんだ〜つまんないの」

リユカ「よ、予想はしていたけどね。皆そんなに責めないで上げよう」（汗）

マルス「もういいんだリユカ・・・もういいんだ・・・」（ガツクリ）

アイク「お前のことだから？実は使えるんだ〜はっはっはっ？とか言いそうでハラハラしたぞ」

ポポ「ア、アイクさん・・・」

マルス「はぁ・・・アイクの言うとおり僕は魔法は使えないよ」

マリオ「逆に使えるなんて言ったら驚きで空飛べるぞ」(笑)

マルス「ははははは・・・」

ピチュー「それで！おまじないの続きは！？」

マルス「それはね・・・」

説明を言いかけて、マルスのはっとした。

皆さつきまでの不安に染まった目ではなく、楽しさに満ち溢れた
明るい瞳を持っていた。

それを見てマルスは安心した。

マルス(よかった・・・みんな元気が出たみたいだ)

ピチュー「続きは？」

マルス「やっぱりやめておこう」

ピチュー「え！」

カービィ「なんでえ！？」

マルス「・・・カービィが自分の手ごと食べちゃいそうだからやめておくね」

カービィ「自分の手を食べる!？」

ピチュー「そんな恐ろしい儀式だったんピチュか!？」

ポポ「手を食べちゃいそうだからって・・・それに近いことをするんですか!？」

マルス「またいつか教えてあげるよ」

マリオ「おっ!あれってヨッシーじゃないか!？」

リュカ「あっ!本当だ!ほかの人たちもいる!」

ポポ「よかった〜ナナはいるかな?」

全員合流まで残り・・・

ゲーム説明開始まで

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1408ba/>

スマブラ小説 星炎の魂 ~ The Battle royal ~

2012年1月6日17時45分発行